

望郷弐

映画文学人生論

- 001) 青べか日記 山本周五郎 参考：青べか物語
002) ぼくの叔父さん 山田洋次 参考：男はつらいよ
003) 新・雪国 笹倉明 参考：雪国 川端康成
004) 郷愁の詩人と謝蕪村 萩原朔太郎
005) 人間の条件 五味川純平 参考：戦争と人間

魂の故郷は時間の遠い彼岸に実在している

「映画文学人生論」というタイトルでまず望郷篇からはじめたのは二年前の二〇一一年二月十一日。それから一ヶ月後の三月十一日に東日本大震災に襲われた。

青べか村は液状化の被害が大きく、ガスや水道の供給ストップが数日間続いたが、村人は誰も命に別状はなかった。

その後、私は予定していた作品百篇をすべて読了してしまったので、もう一度、出発点に戻り、原作の関連本を見つけて、少し違った角度から読み直してみることにする。

青べか物語↓青べか日記 山本周五郎

男はつらいよ↓ぼくの叔父さん 山田洋次

雪国↓新・雪国 笹倉明

八つ墓村↓郷愁の詩人と謝蕪村 萩原朔太郎

戦争と人間↓人間の条件 五味川純平

『青べか物語』が発表されたのは昭和三十五年だが、その材料は昭和三十四年の『青べか日記』に基づいている。原作では主人公が三十年後にもう一度、青べか村を訪れ、昔のことを回想する場面がある。生き急いで、早世した川島雄三監督の映画には三十年の歳月の流れは感じられない。

『男はつらいよ』シリーズは、第四十二作『ぼくの叔父さん』から主役が寅さんから甥の満男に



望郷弐

映画文学人生論

うつり、寅さんは恋の脇役になった。寅さんといえども還暦を過ぎてから恋の主演をつとめるのはきびしい。

主役交替のおかげでこのシリーズは家族のドラマとして考えられるようになった。家族がいなくなれば故郷もない。もし満雄が寅さんの二代目として失恋を繰り返すだけなら、この家族はやがて消滅し、柴又は故郷ではなくなる。

それはともかく、私の故郷は雪国、川端康成の『雪国』は文学の故郷——そう思って、なんども読んでいるが、読解力不足のせいかな、なぜ、これが文学の名作なのか今だに理解し難いところがある、今回は笹倉明『新・雪国』と比較してみた。

ストーリーが面白いとか、主人公に共感できるとか、ではなく、省略や誇張、新しい感覚の描写のような文章の技巧が名作の条件かもしれない。

『八つ墓村』は子供の頃過ごしたのが尼子の落人伝説の村という地縁から、『郷愁の詩人と謝蕪村』は時間の遠い彼岸に実在している魂の故郷に対する「郷愁」に誘われて読んだ。

また、戸籍謄本によれば、私が生まれたのは満州のハルピン。どのような歴史的背景のもとで生まれたのかを知りたいと思い、『戦争と人間』『ノモンハン』のほかに、『人間の條件』『虚構の大義』を読んだ。虚構の故郷への郷愁？

古里や臍のをに泣としのくれ 芭蕉